

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：44305

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26750093

研究課題名(和文) 主体的なキャリア形成のための自己効力感を育む相互評価学習実践モデルの構築

研究課題名(英文) Development of Peer Review Learning Model to Enhance Self-Efficacy for Independent Career Decision-Making

研究代表者

桑原 千幸 (Kawahara, Chiyuki)

京都文教短期大学・ライフデザイン学科・講師

研究者番号：90587479

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、高等教育の初年次キャリア教育において、主体的にキャリアを形成する能力を育むために進路選択自己効力に着目し、相互評価学習の実践モデルを構築することである。相互評価学習の実践をもとに検証した結果、相互評価学習の要素と自己効力の変化の関連の質的検討から、他者から評価を受けることによって自信を獲得し、進路選択課題の達成につながり、効力感に影響する可能性が示唆された。相互評価学習を含む授業設計が、対面授業とeラーニング科目において自己効力向上に有効であるものの、長期的に進路選択自己効力を維持するための方策、相互評価学習システムの改善、学習コミュニティ構築の必要性が浮かび上がった。

研究成果の概要(英文)：The objective of this study is development of peer review learning model in a first-year career education course for college students, focusing on "Career Decision-Making Self-Efficacy" (CDMSE) in order to facilitate the skills necessary to make independent career decisions. As a result of the verification based on the practice of peer review learning, 1) From the qualitative examination of the relationship between the elements of peer review learning and the change of CDMSE, it was suggested that acquiring confidence by receiving an evaluation from others, leading to the achievement of tasks, and affecting CDMSE, and 2) Although course design including peer review learning is effective for enhancement of CDMSE both in a face-to-face class and an e-learning course, it was suggested that further improvements are needed in the following areas: the means to sustain CDMSE scores over a long period of time, the peer review learning system, and building of learning community.

研究分野：教育工学

キーワード：キャリア教育 授業設計 進路選択自己効力 相互評価学習 高等教育

1. 研究開始当初の背景

キャリア教育で育成すべき基礎的・汎用的能力の一つである「キャリアプランニング能力」(中教審答申 2011)は、主体的にキャリアを形成する力であり、Bandura の自己効力感 (self-efficacy) を背景とする「進路選択に対する自己効力」(以下「進路選択自己効力」と記す)に大きく関わる。進路選択自己効力は実際の進路選択行動や進路不決断と強く関連しており、介入により変容させることが可能なため、進路選択自己効力を高めることでキャリアプランニング能力を育むことができると考えられる。進路選択自己効力を高める方法については多くの先行研究があるが、適切な介入方法は明らかではない。

自己効力感の育成には学習者参加型の体験的な要素と自身の学びを振り返るプロセスが有効である。社会構成主義の学習理論では、学習活動のプロセスや学習者間の相互作用が重視され、学生の能動的な学習を促すアクティブラーニングも注目されている。またキャリア領域でもサビカスのキャリア構築理論に代表されるように、他者との相互作用の中で主観的なキャリアを再構成していくプロセスが重視されるようになってきている。したがって、学生主体の学習方法の一つである相互評価学習は、他者の成果から学ぶと同時に、他者視点の参照により自己の内省を促すことができるため、キャリア教育において有効な学習方法であると考えられるが、キャリア教育正課科目での ICT による相互評価学習については研究の余地がある。

そこで、研究代表者はオープンソースの学習管理システム Moodle を用いてキャリアプランニングに関するプレゼンテーションの相互評価学習を行い、キャリア教育科目の受講生と非受講生を比較する調査を実施し、受講生の進路選択自己効力が相互評価学習の実施前後に有意に向上すること、相互評価学習実践から約 2 ヶ月後には学習直前の水準まで低下するものの非受講生と比較すると高い水準であることを明らかにしてきたが、実践から得られる具体的データをもとに相互評価学習の要素と効力感の因果関係を明らかにし、さらに効果的なキャリア教育向けの相互評価学習モデルを構築する研究の必要性が浮かび上がった。

2. 研究の目的

高等教育機関における入学初年次のキャリア教育では、主体的にキャリアを形成する能力を育むことで学生に目的意識を持たせ、学習や進路選択への意欲向上につなげることが重要である。本研究の目的は、キャリア教育において主体的にキャリアを形成する能力や態度を育むための相互評価学習の実践方法をシステムと授業設計の両面から検討し、相互評価学習の実践モデルを構築することである。具体的には次の点について明らかにする。

A. 学習者は、キャリア教育における相互評価学習のどの要素で効力感を感じているのか。
B. 相互評価学習で効力感を向上させるための相互評価学習システムが備える要件は何か。

C. 効力感を向上させ、さらに維持させるためにはどのような授業デザインが効果的か。

3. 研究の方法

本研究では、キャリア教育において主体的にキャリアを形成する能力に対する自己効力感を高める相互評価学習の実践モデルを構築するために、下記項目について研究を実施した。

A. 相互評価学習の要素と自己効力感の因果関係をモデル化：学習者が、キャリア教育における相互評価学習のどの要素で効力感を感じるのかを、学習プロセスと学習者インタビューの質的分析によって検討し、仮説を生成する。また、仮説と学習動機づけ理論を参考に質問紙調査を行い、相互評価学習の要素と効力感の因果関係を検討する。

B. 効力感を向上させる相互評価学習システムの開発：相互評価学習でより効力感を高めるための相互評価学習システムが備える要件を検討し、Moodle をベースにシステムの開発に取り組む。

C. 効力感を向上させ、さらに維持させる授業デザインの検討と効果検証：A, B をもとに授業設計を行い、対面授業および非同期 e ラーニング科目における実践で効果を検証する。

4. 研究成果

(1) 相互評価学習の要素と効力感の因果関係
学習者インタビューの実施

学習者が、キャリア教育における相互評価学習のどの要素で効力感を感じているのかを明らかにするため、半構造化形式のインタビューを実施した。対象は、H26 年度前期のキャリア教育科目の受講生 10 名であり、一人当たり 30 分程度をかけて、1 対 1 で聞き取りを行った。インタビューガイドは前年度に実施した予備調査をもとに作成し、主にキャリアプラン作成と発表といった課題の認知と、相互評価をすることについての考え、相互評価学習前後の変容について尋ねた。合わせて、課題に対する効力感を把握するための質問紙調査を行った。

進路選択自己効力尺度の下位項目の分析

相互評価学習の事前事後における学習者の進路選択自己効力の変化を調査し、尺度の各項目の変化を検証した。その結果、進路選択自己効力尺度の 30 項目中 24 項目が有意に上昇しており、特に自己評価、目標選択、将来設計に関わる項目に変化が多く見られることが明らかになった。本成果を、2015 年 9 月の日本教育工学会全国大会にて発表した。

相互評価学習の要素と自己効力の変化の関連の質的検討

対面授業の受講生のアンケート調査の自

由記述から，進路選択課題に関わる相互評価学習を通じて自己効力がどのように変化したか質的に検討したところ，多くの学習者がキャリア意識の変化や効力感の変化を認識しており，特に「キャリアプラン作成」という進路選択課題への取り組みや達成そのものが効力感の変化に大きく関わっていることが明らかになった．また，他者を評価することによって学習者自身の視野や価値観が広がり，他者から評価を受けることが自身の進路選択課題への自信を後押しするといったように，相互評価学習が進路選択課題の達成につながり，効力感に影響する可能性が示唆された．これらの要素と効力感の関連の仮説を図1に示す．本成果を，2016年9月の日本教育工学会全国大会にて発表した．

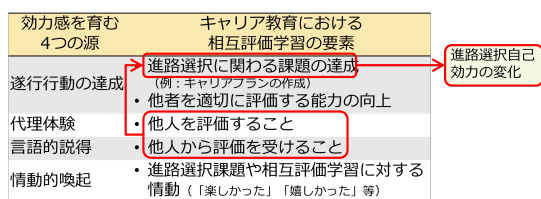


図1 相互評価学習の要素と自己効力の関連の仮説

(2) 相互評価学習システムの検討と開発

所属機関内のサーバに，Moodleをインストールし，構築・設定作業を行い，相互評価学習モジュールの最新の仕様を確認した．対面授業実践後の受講生のアンケート調査をもとに，授業デザインの改善を検討した．システムの使いやすさについて受講生の94.3%が肯定的に回答し，相互評価学習についても肯定的に受け止めていることが分かった．一方で，自由記述の分析から，評価対象者の割当方法，評価入力時間の確保，評価対象選択画面での表示方法，評価入力フォームについてそれぞれ改善の必要性が明らかになった．本成果を，2016年9月の教育システム情報学会全国大会にて発表した．

さらに，講義収録システムとMoodleの相互評価学習用プラグインモジュールを新たに導入し，既存システムへのインストールと試験運用を行った．上述の受講生のアンケート調査の自由記述の分析をもとに，評価対象者の割当方法や評価対象選択画面のインタフェース等について，新たなモジュールを用いた解決方法を検討した．

(3) 相互評価学習の授業デザイン検討

開講時期と進路選択自己効力の関連

キャリア教育では，科目の配当年次や時期によって学習者のキャリア発達に差が生じることが考えられる．そこで，H25年度のキャリア教育科目について，開講時期によって受講生の進路選択自己効力の変容に差が生じるかを調査したところ，後期開講の初年次キャリア教育科目における相互評価学習によって前期と同様に受講生の進路選択自己効力が向上すること，キャリア教育科目の前

期受講生は入学からの1年間で進路選択自己効力が向上しているものの，非受講生は後期開始の時点でやや下がり，1年間でほぼ変化がないことが明らかになった(図2)．相互評価学習の授業デザインについて，初年次キャリア教育科目における実践は受講時期を問わず進路選択自己効力の向上に有効であるものの，自己効力維持のためには，学習方法の改善やその後のフォローが必要であることが示唆された．本成果を，2014年7月の日本教育工学会研究会において発表した．

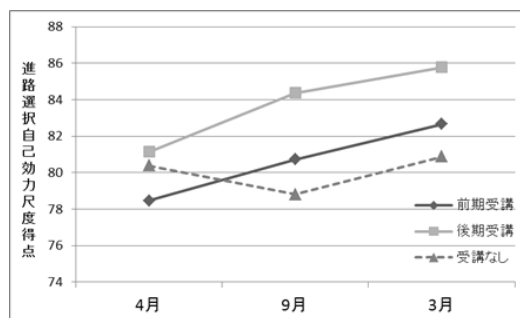


図2 受講時期/有無と進路選択自己効力の変容

e ラーニングキャリア教育科目の受講生の特性分析

多様な学生が受講するeラーニング科目における相互評価学習を含む授業デザインを検討するため，H26年度にオンラインで開講されたキャリア教育科目について，受講生の特性を分析・可視化することを目的として，進路選択自己効力の調査と，コース志望理由の計量テキスト分析を行った．分析結果から，全国平均よりも進路選択自己効力の高い学生が受講していること，受講生の学年によって志望理由や科目への期待が異なることが示唆された．本成果を，2015年9月の教育システム情報学会全国大会にて発表した．

非同期eラーニング科目による進路選択自己効力の変化と授業設計の課題

相互評価学習を含む非同期eラーニング科目の受講生の進路選択自己効力の変化を授業の事前事後で調査したところ，対面授業や全国調査のデータと比較して平均的に進路選択自己効力が高い学生が受講しているものの，授業の実施前後で進路選択自己効力が有意に向上し，特に授業開始時に自己効力が低い群が進路選択自己効力を高めていることが明らかになった(図3)．対面授業を参考にして，学習者間の相互作用に重点を置いた授業設計が，非同期eラーニングキャリア教育科目にも適用可能であることが示唆された．受講生の課題の認知に関する調査からは，授業終了後にもキャリアプラン作成や相互評価学習に継続して取り組みたいと思わせる授業設計の必要性が浮かび上がった．相互評価学習を中心としたeラーニング科目の授業設計においては学習進度や評価者の割り当てが課題であり，さまざまなキャリア発達段階の受講生が相

相互作用を通じて自己効力やキャリア意識を高めていくことができるように、非同期 eラーニングならではの相互評価学習方法やシステムについて、活発な相互コメントを促すコミュニティづくり、足場かけなどのさらなる検討が必要であると考えられる。本成果は教育システム情報学会誌に論文として投稿し、2017年に掲載された。

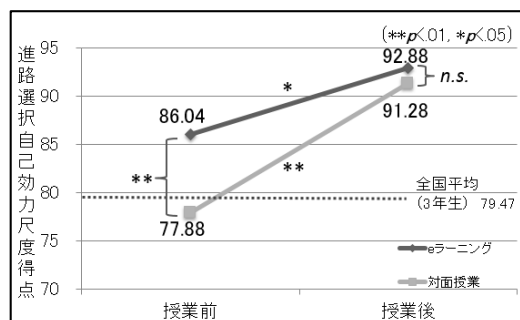


図3 受講生の進路選択自己効力の変化の比較

(4) 本研究により、対面授業とeラーニングの両方の実践をもとに主体的にキャリアを形成する能力を高める相互評価学習の実践モデルを提案し、キャリア教育の効果的な実践と相互評価学習研究に対して一定の成果を示すことができたと言える。しかしながら、相互評価学習の要素と効力感の因果関係については、特に質的な分析の研究余地があるため、今後の研究課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

桑原千幸・喜多敏博・合田美子・鈴木克明, 2017, 非同期eラーニングキャリア教育科目における相互評価学習の実践と進路選択自己効力の変化, 教育システム情報学会誌, 34(3), 238-250, 査読有

DOI: 10.14926/jsise.32.238

桑原千幸・喜多敏博・合田美子・根本淳子・鈴木克明, 2014, 初年次キャリア教育科目における相互評価学習の実践と進路選択自己効力の向上, 日本教育工学会論文誌, 38(2), 79-89, 査読有

〔学会発表〕(計5件)

桑原千幸・喜多敏博・合田美子・鈴木克明, キャリア教育科目における相互評価学習の要素と自己効力の変化の関連の検討, 日本教育工学会 第32回全国大会, 2016

桑原千幸・喜多敏博・合田美子・鈴木克明, キャリア教育科目における Moodle を活用した相互評価学習方法の改善, 教育システム情報学会 第41回全国大会, 2016

桑原千幸・喜多敏博・合田美子・鈴木克明, 相互評価学習による進路選択自己効力の変化 - 尺度項目の分析 -, 日本教育工学会 第31回全国大会, 2015

桑原千幸・喜多敏博・合田美子・鈴木克明, eラーニングキャリア教育科目の受講生

の特性分析, 教育システム情報学会 第40回全国大会, 2015

桑原千幸・喜多敏博・合田美子・根本淳子・鈴木克明, 短期大学におけるキャリア教育科目の受講時期と進路選択自己効力の変容, 日本教育工学会研究会(JSET14-3), 2014

6. 研究組織

(1) 研究代表者

桑原 千幸 (KUWAHARA, Chiyuki)

京都文教短期大学・ライフデザイン学科・講師

研究者番号: 90587479